芭蕉句解参考

近世誹諧句解世に行はるゝことの
あまたなるが中に雪中庵叟の
著はせる句解をもて人ごとにもてあそび
て帳中の秘書となしてけるが中に
いさゝかのあやまちありて毫釐の差
も千里を謬ることもありやせんと
能静老人是を歎きてまたく

俳諧の中にある人ハ此草稿に随ひ
まことを用ひ紀しかうして句を詠
参考し點世話あるひきを志るし
てよむべし何をか成せん松蘿老乃
窓下に筆を採りて志るす

文化三寅年冬日

武陽州上谷
笻雨散人

凡例

一 此考ハ先師蓼太句解にもれて考ふるものを記すそのうちにいたる師説は齟齬するものハ見所ニ為考則考とゐたれ説と志るして句解の説を略し記すものは既に句解の梓行あるゆゑなり也句解乃まゝ可考ものなきハ句と不出

一 無キ句解ニハ加テ圏ヲ以テ別ツ之ヲ

一 従フ春之部ニ依テ蝶夢芭蕉句集ニ出ス其句ヲ

其考を志るし且愚考を志るす

文化三寅秋

能静廬

荘丹謹記

芭蕉句解参考上

能静叟荘丹著
菜囿 菜英校

炭俵
蓬莱にきかばや伊勢の初だより

説 此春は伊勢にしる人おとづれてたよりうれしき花柑子の香 慈鎮

考 説義最大全 素丸子編 拾玉和歌集 慈鎮家集第四
加茂社百首和歌是十五首の内
其のたびは云々詞書あり又類句あり

庭のと書出したりるあると出せれと
百菴萬々葉夫木集にも載之永閑か
藻鹽草にのせられてあり第四の句
道あるゆゑあまた慈鎮和尚の眞蹟下
帖を管見しその此句は決之玄来
抄に男各之ヲ

蒟蒻よくふは賣うり若菜か非

説 拾遺集物の名　野をとみまふは恙め餘り
まはしらてにやくまかしられ一む

○春雨や蜂の巣つたふ屋根の漏　炭俵

へ　はるさめは夜也　考 防已ねまし

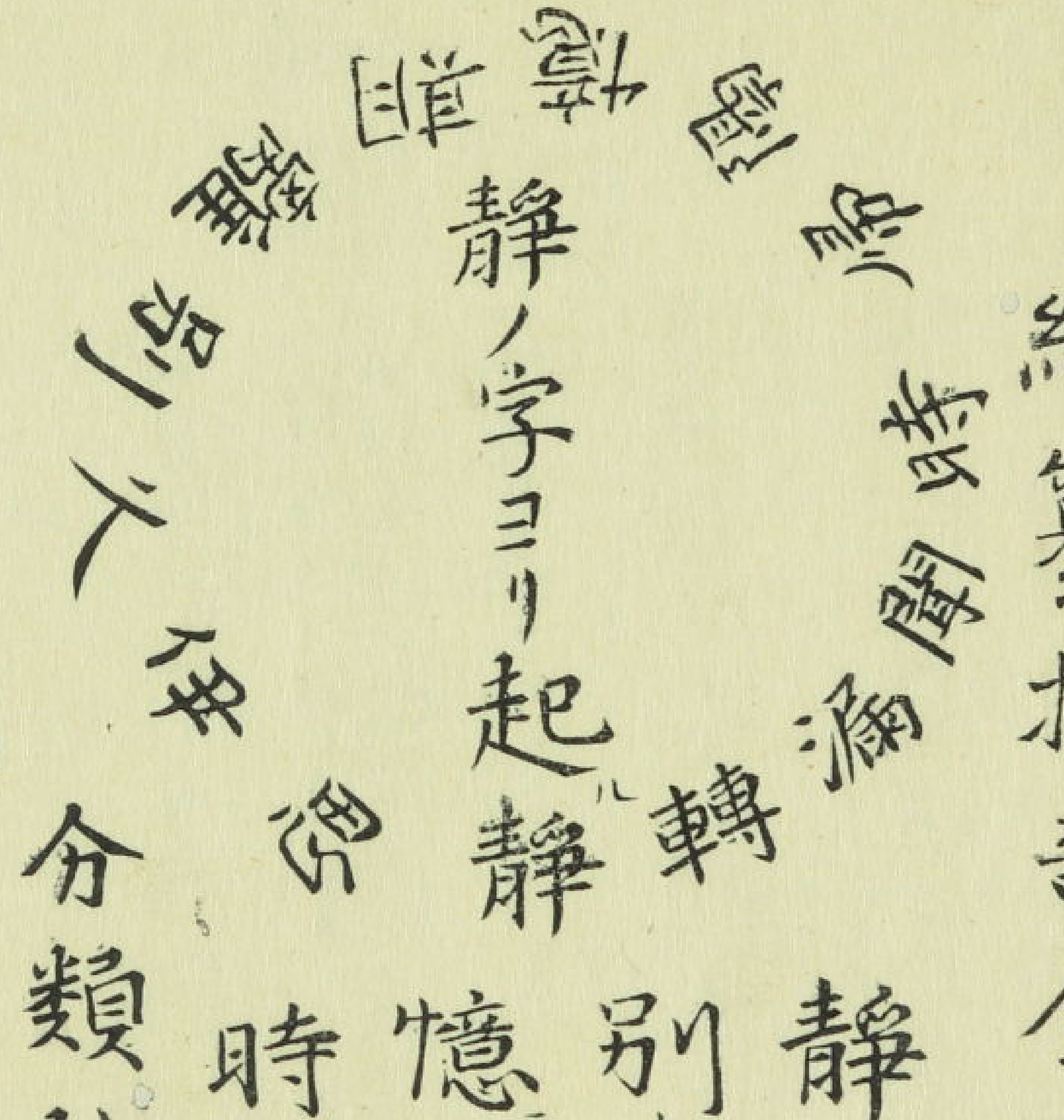
考 新古今 閑中乃春雨といふことを
はるゝと春のかすみにけふしもはるふ
みぬかふ杉の玉水　大僧正行慶

○留守の戸の濡ても折らむ雨の花　路草亭

考 櫻狩あそびにうかりきのかねしくらぬる
ともなき我のかをにしくまかる　實方
きれぎのれ標乃はちきれしかへ然

説 宇陀法師ニ許六ガサハル栖ノ玉連環ノ体
東坡喜禅集ニ寄内ニ静ニ思フ伊ヲ久シク隔ル帰期
憶フ別離ヲ時ニ聞ク漏転スル 考 眉公陳先生
縁纂捜奇全書
讀法
静ニ思ヘ伊ヲ久シク別離ノ期
別離ノ期憶フ阻ツ帰ル時
憶テ帰リ帰ル時聞漏転
時ニ聞漏ノ転スル静ニ思フ伊

錦纏枝玉連環文



分類故事要語十二見ヘタリ

浪化集サハル栖去来許六支考サハル栖ナリ
史邦小文庫ニ先師ノ句按シ二首キレ連歌ノ
説アレトモ 丹 按ニ俳諧ノ句ハ俗語ナレハ元来
詞ツヽキツヽカス歌連歌トハ別ナリ旨キルヲ
トカメハ皆キレテツヽカス故ニ此説ハ不取

水取や氷の僧の履の音 二月堂に こもりて

説 若狭遠敷大明神ヨリ二月堂観世音
ヘ献セシメ玉フ水涌出硯ニ汲ミ霊符ヲ印ス
一ニコモリノ僧佳ナルカ 考 履ノ音ノ氷ヲ

フムコトクヒ、クヲ云ナルヘシ亦佳ナルカ

当帰よりあはれは塚のすみれ草

呂丸ヶ招にて及せしをつゝむことを書けり

説 呂丸ハ出羽羽黒ノ麓ノ人唐ノ孟遅カ蘼蕪ー
蘼蕪亦是王孫草莫送春香入客衣ー
蕪ー名ハ當帰 考 閑情ト題アリテ山ー
上有山帰不得湘江暮雨鷓鴣飛
是一二ノ句也王孫ハ又ハリ草又ツチハリ

○よし野にて

山桜尾ゆくさのまゝ川ゆくら

蝶夢芭蕉発句集ニ此ところ出たり

説 尾フクモノハ一二ノ蔵王堂ヲ云カ 考 長嘯ー
子山家ノ記ニ見ヘ挙白集ニ住ル所ハ瓦フケルモノニツト
アリ此文ノ詞ヲ用ヒルナラム蕉翁此集ノ文ヲ
好ムト云山家ノ記ニツアリハヒメノ記ナリ

○何乃木濃花とハ志らす匂ひ哉

考 一ニ志らぬ身ぞれ親句といふ説あり
山家集
何事のおはしますをは志らねともかたしけなさに涙こほるゝ 西行

○何乃木孫

聲にうき日をふくむ鶯　益光
春深き柴の梢も雪掃て　文流
平菴　勝延　清里六吟益光両吟よ
くもゝ見えぬ分出(デ)をとても貞享五年春芭蕉下
〇螢見や船頭酔ておぼつかな　勢田の螢見とて出たり
考　上林三入の許にて此句也し
〇夏の月御油より出て赤坂や
考　傳書に此句諸集赤坂やと出せるを見
此の誤なるべし先師嵐雪袖日記を讀と

を哉と通ふに歟　古今　あさみどりいとより
かけて白露を玉にもぬける春の柳か　僧正遍昭
〇許六が木曽路に趣くとき
續猿　旅人の心にも似よ椎の花
説　許六をおくるに心を注したる文あり
略之　家ニアレハ笥ニモル飯ヲ草枕旅ニシアレハ
椎ノ葉ニモル　考　萬葉集第二巻　蝶夢芭蕉發句集に椎の花の心にも似よ木曽の旅とあり
こゝろつくしや秋露にしをるゝや女郎花
説　續古　何事を思の園の女郎花におもむき

あれなゝめ露こそかゝらむ　俊恵

考 一に露涼し

○志ら露もこぼさぬ萩のうねりかな

考 萩塚ノ碑ニ（在于江戸巣鴨医王山真性寺）志ら露もこぼれぬ萩のうねりかな題ニ杉風萩ニとあり

蝶夢芭蕉発句集もこぼれぬとあり

萩植てひとり見つゝ帰る山路かな　杉風

○秋風に落葉おちらす行衛かな

考 此句は加賀小松天神別当能順連歌俳諧の差別を問しに云下に書る句也同の句は上文字秋風は。ぬり按ずるに

里は冬こそはさびしさのは。なれや言る句は今の光のどけき春の日にも。なれやと連俳のまことなり口授あり○此句集にはかへさて

見渡せば詠れば見れば須磨の秋

説 鏡花水月の妙所

考 見渡せばとみとの二つあらされば。これ。それはゆゑなかれみすらきちぬ事も詠れは是程よ味ふかきあはれ同前をとこれはとおもひてしとけなれどもこれくまでなれざるかな事即妙所なりと

○風流のはしめや奥の田植唄

考 細道の句也 奥州岩瀬郡相楽伊左衛門亭にて

風流乃

いちごを折て我まうけ草　等窮

水せきて昼寝の石やなほすらん　曽良

三吟歌仙あり

○（甲子紀行）杜牧か早行の残夢小夜の中山に至てたちまち驚く

○馬に寐て残夢月遠し茶の烟

考 杜牧字ハ牧之唐ノ人早行ノ詩丈山詩仙堂ノ之一ニテ詩仙堂ニカクト堂ハ叡山ノ麓一乗寺村ニアリ　早行垂ヨ鞭ヲ信テ馬ニ行ツ数里未タ鶏鳴ナラ林下ニ帯残夢ヲ

○伊勢の国又玄か宅にとゝめられ侍る頃その妻男の心にひとしく物毎にまめやかに見えけれは云々　泊船集洪沢書　蝶夢集のこと書これらにあり　勧進帳にありとそ

月さひよ明智か妻の咄せむ

【考】明智日向守いまだ浪人なりし時
古傳業にいふかひなくして元来貧しく餐に
撰集晋隨筆流之冊事同之 旋すべきもなかりし取次の連歌の会を
まかりしよ髪をきりて銭にかへて会をなしけるとぞ
のへ出ん妻後日光秀出世しかの城にし
あれはおもひは明智あやしというふといふの
事とそうらはれぬ乃妻は明智十兵衛の後
いしれけるはしける疱瘡にて面貌かわれ
親のその妹と引替へしをまた耳はんのいくるさ

ともしに初の約束をまもりたまひそれは感し
かゝる事もありしかと此事信長
記太閤記明智軍記武邊物語等にも見
えず妻は妻木氏にや世説武外赤城
村雜雪といへる俳諧の書に之その父乃
とのかくりなりしと此人後に遁世して

紫乃戸出ぬ月やそのまゝ阿弥陀坊

【説】紫の庵ときこえしはいやしきも世
にそのはしき住居ありけり　西行　山家集

或書ニ曽テ空也無水之地ニ穿井ヲ井必卑
涼以其常ニ唱弥陀号ヲ俗名弥陀井ト往
々而在焉荒原曠野ニ毋逢遺骨ヲ据哀テ一
處ニ念弥陀名ヨテ世ニアミタ坊ト云又市上人トモ
考 市中ハ観念ノタヨリアリト常ニ在市中ニ故ニ
云ト ○蕉蓑集にはこゝもとかり略す

○笠中菴

みの虫の音を聞に来よ草の菴

考 翁故郷在于伊賀山中ナルニ

○鳴海知足亭

よき家や雀よろこぶ脊戸の粟

説 淮南子十七説林訓曰湯沐具而蟣虱相弔ス
大廈成而燕雀相賀ス 考 賀下ニ憂樂別也ト
アリ蟣ハ虱ノ子キサヽト訓ス

○旅行

細道 あかあかと日はつれなくも秋の風

説 袖日記嵐雪書 翁生涯二三章の秀逸ト

新古今 旅人の袖ふきかへす秋風に夕日

淋しさに山乃かけさし　定家

考 王世貞天雄道中（大名府郎 宋天雄軍）秋風吹テ将ニ暮
古道行跡稀ナリ愛ス此微陽色射ル我霜中ノ衣ヲ
是只妙境　徂徠絶句解サヒシミト同シクシテツ
レナキト愛ストノカハリタル所味フヘシ

枯

枯枝に烏のとまりけり秋の暮

説 夫木集 さむからし孫くらにやせむ篇てより
霧乃枝のおそろしき郷　慈鎮

考 此眼素堂 鵙なけ行霧の遠里人

今以人の字を省きて見れは此句季吟素堂
翁家語口傳の三章此一無し正風のおとり此句
ぬ事も拾口授あり坂昌周嘗て云から枝と
ちみくから枝よからすをいひしけまる句と
聞し又唐ノ李頎カ嶺ニ沅枯柳宿ス寒鴉
暗ニ諧フ七言律贈ル盧五舊居ニ詩也

山

山ゑこれ密柑の色乃黄になりにけり

説 第三の句とおもふ　考 柳風篁雨筑
紫紀行に伊賀の出津村に密柑の樹

家に家あり故翁の句此頃の言しき附合よ
作りなし給ふりいつも川みちの辺此あたり
ぬるもかしも山家もいあしくのかせ山なる事
伊賀ハ上野猿雖亭にて元禄の初戊九月
四日　松風に新酒をすます夜寒哉
支考発句猿雖脇第三翁以十句あり
二の表四句目に　一里の舩も渡しのまたる
本ノマヽ
嘉ら嬢家　山ハこゝろし　ーー右猿帋
支考執筆にて猿雖の孫上野桐雨許

持ぬ男

元とふ謠ハもこふはたちぬ男おまへの詠哉

花蘿ハ長男の名を いへる山家集の歌なからを引ても

考 西行山家集花蘿かちやらぬんの心をよめる
持ち聞てへ余にと祝る人いとられみこの
この待もとふもとのへ卸かなのする古来ノ集趙南ノ
字ニ誤ル蝶夢ノ始テ長男ニ改ム史記四十一越世
家第十三終ニ今臣出道路ニ皆言陶之富人
朱公之子殺シテ人ヲ囚ハル楚ニ其家多ク持シテ金銭ヲ賂ヒ王ノ
左右ニ故ニ王非ス能ク恤テ楚国ヲ而赦スニ乃以テ朱公ノ子ノ故ヲ

也楚王大怒曰寡人雖不德耳奈何以朱公之子故而施惠乎令論殺朱公子明日遂下赦令朱公長男竟持其弟喪歸至其母及邑人盡哀之唯朱公獨笑曰吾固知必殺其弟也彼非不愛其弟顧有所不能忍者也是少與我俱見苦爲生難故重棄財至如少弟者生而見我富乘堅驅良逐狡兎豈知財所從來故輕去之非所惜吝云云 徐廣曰校作郊

此事又呉越軍談康頼宝物集等ニモ近見ユ

彼男ノ人ヲ傷リシヲ長男タル者ニ金ヲ與ヘ罪ヲアカナヒニヤリシヲ金ヲ惜ミ終ニ罪ニイリタルヲサテ山家集公ハ家集ノ内西行家ノ集ナリ長男ハ假名ニテアリ又公ハ翁寒ク菊ノ氷ヲ花ニタクノハヘタル財ヲ惜ムカ如シトノ觀念ノ句也

范蠡字ハ少伯後爲越上將與句踐深謀二十年功成名遂棄扁舟適齊稱鴟夷子ト

○老慵

蛛巣集よりもとめて

蛎よりハ海苔をハ老の賣もせで

説 山家集雑之部に串にさしたる物をあきなひけるを何ぞと問ければ蛤をほしてはべるなりと申けるを聞て
おなじくはかきをぞさしてほしもすべき蛤よりは名もたよりあり　看経

ヒキノヨシ 考 こは僻ごとなるべし蛤は栗の
形したるもの栗なれば蛎は柿のかき盡に
されば串柿之栗より柿とのうたゝりあるも

○月影や四門四宗もたゞ一ツ　善光寺にて　ばせを出有

追考 東ハ定額山善光寺西ハ不捨山浄土寺南ハ南命山無量寿寺北ハ北空山雲上寺ト云

考 善光寺は四方に四門ありて寺号も各也四宗ハ未詳
又尚書舜典闢四門明四目達四聰といふは此詞によるか

○撓ひ来る鮑釣り採る海女七里まで　執留 ほてとこゝ法て

考 萬葉集第九 水江之浦島兒堅魚釣鯛釣矜及七日

○貞享元子歳

○歳暮 霜月し心はせよとの松のさと里

考 古今集第十物の名 はせをば 云も
ちせとも いさゝめに時まつまにぞ日はへぬ

かれいせをとふ人もなき所　紀のめ也

○愛方知酒聖貧覚銭神　盧栗愛作　憂佳乎

○義もしらぬ世なら酒白く飯黒し

考 晋書九十列傳六十四魯褒字元道南陽人云々著銭神論　魏書清酒為聖人濁者為賢人

○おそくさく山吹ちるか激瀧のおと　西河ともいふ

考 岸の山吹とよみたるは野の川上は（西河をいふ所く里人ニシゴウといふ よしのゝ訛言）皆山吹ありて春ともなれば咲こぼれて いかなる書にも詞書ありよしの川　新古今

岸の山吹咲にけり峯の桜やちりはてぬらん　家隆

○海苔汁の手際こそ見えし浅黄椀

○御草子の黒うなるにて

考 海苔の紫ふ浅葱の形容

御新酒や油のやうなる酒五升

説 日蓮上人報書に新麦一斗笋三本油のやうなる酒五升南無妙法蓮華経と回向いたしぬ　考 見風俗文選

蕣に手水汲くれし男かな

説 袖日記に云久方の光のどけき春の日にしづ心なく花のちるらむといふ歌の言葉をとりてさて此句聞事難し口授 考 春の日にはかばご心をとめてしらむべき歌虚栗に和角蓼螢句合こと書あれど 飲酒夜起請尊朝親王御作之由云此文句を拿して大酒は法無用となれば此一句あさく聞ゆべし 其角丈 芭蕉

草の戸に我は蓼くふ螢かな 其角

芭蕉句解參考上畢

芭蕉句解參考下

熊静叟文荘舟著

春之部

菜窗菜英校

○梅咲やしらゝ落くぼ京太郎

考 和訓栞（シヲリ）にしらゝといふは十訓抄に見えし紀乃國しらゝの濱なるべし紫式部日記にしらゝとあれど伊勢のしらゝの濱は西行法師哥夫木集にこゝをよめる事根倉とくみ合まろが哥もあれは倭姫世記に白

涵うられうきりく云云志らく落くれ京太る中云

濵ノ真名胡ノ国ト云ル所ナルへし
丹桜ニ亦 山家集 浪かけて見れ志らく濃
濵のうら風見えるしやなくもかなゆるれ
落葉京太郎皆双帋ノ形容ト聞フ

○猫所ら行人よ

○獺の祭みて来よ瀬田のおく

考 芭水此句ある書留月七日とあれとも志らるま
禮記月令ニ孟春之月云云獺祭魚
鴻雁来ル

春日集

○古池や蛙とびこむ水乃おと

考 岩そゝくみより外よおとせ[illegible]
とちてとめしくそきて 此句雖不可注脚
為之闇其意アリ畢竟閑居ノ句此昭
芦の若葉よからまる蜘の巣 其角 但春日集

二八三エス

○草菴に桃桜ありて人に[illegible]角嵐雪[illegible]

○両乃手に桃と櫻や草の餅

考 未来記ニ云仙よ嵐雪と是とをかりとあつま

桃實集にハありとあまた　菓子盆に
芥子人形やもゝの花　其角　雛の日や
鰹ハ貧人までもかハて　嵐雪　共に上巳の句也

○さびしさや華のあたりのあすならふ　畧

考　あすならふ桧の類　笈の小文　日ハ花に
くれてさひしや──

○龍門　二句

○酒のみにかたらんかゝる滝の花

考　龍門　吉野郡宇多郡之界龍門寺義淵
僧正営之ヲ今唯礎存スト云　李白
飛流直下三千尺　笈の小文　龍門の花や
上戸の土産にせん

○かつらき山の麓を通るに四方の花ハ
さかりにて嶺々ハ霞わたりたる明
ぼのゝ景色いと艶なるにかの神ハ
かたちあしきと人の口さかなく世に
いひつたへ侍れハ
猶見たし花に明行神の顔

考 岩はしのよるのちきりも絶ぬへし明るわひしきかつらきの神

拾遺 十八 大納言朝光下﨟に侍りける時女のもとに忍ひてまかりて暁にかへらしといひけれは

春宮の女蔵人左近 岩橋の ―

○望ニテ湖水ヲ惜ム春ヲ

ゆく春をあふみの人とおしみける 蕉

考 古今集 八 離別哥 さたときのみこの家にてふちはらのきよふか近江のすけにまかりける時にむまのはなむけしける時によめる 紀のとしさた ○けふわかれあすはあふみとおもへともよやふけぬらん袖のつゆけき ○ 按 此哥によりて此ハ近江を云るなるへし

細道 桜より松ハ二木を三月こし

考 蝶夢集ニ出ス夏之部ニ佳也

夏之部

〇山﨑宗鑑屋敷にて逍遥殿より
宗鑑がすがたを絵にかゝれけるが餓鬼(がき)のやうなれば
おかしかりけることを思ひて心のうちよ
いふ

ゆりかゝき姿拾むかきつばた

説 近衛殿下龍山公宗鑑をの
かきつばたたれとて池水のうむ
を御覧ありて。宗鑑が
姿を——と興しありけれハ

のまんとすれど夏の沢水　宗鑑とつけられしと云
なをくはしかるへし　考 晋子雑談集宇治へ
逍遥の跡のまんとすれどとよまるゝ事あり
或ハ光廣卿の発句とぞ

ふとくきゝし正月(むつき)ハ梅の花咲り

説 咲り　考 蝶夢集さり

〇飛かふて恋の江に撰ふやはつきほ

〇かくときゝて蘇撰たふや水のうへ

考 諸集共二句沾徳カ判ニテ水ノ上ニ定リヌト

○灌仏や皺手合する数珠の音

考 忌水涅槃会トアリシトツ

夏来てもたゞひとつ葉の一ッ葉

考 アラ埜一ッ哉 蝶夢集ひとつ葉

和漢三才図会
石葦（ヒトツハ）
和名以波乃加波
一名以波及美

○画讃

○馬ぼく〳〵我を絵に見る夏野哉

考 泊船集冬野かな 忌水夏野なるへし 我を絵に見る心かな 按に連歌の賦物に
も夏馬あり

○家富て牧の小さき馳走哉

考 小文庫に桃隣のことを書て旅衣のまき
見残しつくさず草を並へてちいさき〳〵とあり

○細道
暫時は滝にこもるや夏の初 うらみの滝といふ

考 下野日光山二四十八滝あり裏見ノ

滝ハ大石山ノ崖ニ出テ岩窟アリ高サ一丈アマリ深サ二丈バカリ三途川ノ榲トテ石像アリコレヨリ瀧ノ本ニ出瀧ノ裏ヲ見ニ二丈六尺バカリ上ニ石像ノ不動明王アリト云見ニ諸国里人談ニ

○はみちれや蚕にかふ桑のちる

考 諸集蚕むしろつま畑佳かる歟

○細道 象潟や雨に西施かねふの花

考 東坡飲湖上初晴後雨二首其一水光瀲灧晴方好山色空濛雨亦奇欲把西湖比西子淡粧濃抹總相宜 貴妃宿酒不醒玄宗海棠睡未足耶 象潟合歡多クアリトナリ

○森川許六餞別二句

○椎の花の心にも似よ木曽の旅

○うき人の旅にもならへ木曽の蝿

説 旅人の心にも似よ椎の花の解あま

考 歌ハ萬葉集第二

○細道 蚤虱馬の尿する枕もと

三ノ腹切物三ツ 梅若菜まりこ宿の
とろゝ汁の格

○手をうてば木魂に明る夏の月

考 諸集夏の夜や木魂に明る下駄の音

○いでや我よき布きたり 蟬衣

考 諸集よき切あきたり蟬衣一ヶ考

○盤斎うしろむきたる像

○団扇取てあふかん人のうしろむき

考 盤斎寛文の頃の人徒然草盤斎抄
等あり 世の中をうしろになして山
里にそむきたるも墨染の袖 盤斎
又諸集団扇もてあふかん人のうしろむき

○破風口に日影やよはる夕すゞみ

考 此句ニテ素堂ト和漢ノ歌仙アリ煮茶ノ蠅ヲ
避ケ煙ヲ 素堂 見ニ三ヶ月日記ニ諸集庵破

風よ入りやしらすき夕さゝへ

○腥水采石をかゝえひ立ゐる

○むかしは宮居にこゆる住居が跡

考 忘水飛驒の工が宮圖の跡

○秋芳軒宜白が招に応じて長途の愁をなぐさむ 又稲葉山の松の下すゞみして

○山かげや身をやしなはむ瓜畑

考 笈日記落梧何がしが招に 稲葉山の夏涼は岐阜也

○初茸や森雲母やらむ獨りやせん

考 諸集竪にやらん

○古来の別趣にて

○朝露によごれて涼し瓜の泥

考 忘水 瓜の土 諸集眞桑瓜

○さゞれ蟹足はひ上る清水哉

考 足ハ芦ならむ

○晋の淵明をうらやむ

○窓形りに昼寝のござやたかむしろ

考 忘水 臺や 諸集茣蓙や 晋書隠逸

傳陶潜字元亮潯陽人大司馬侃曽孫云云嘗言夏月虚閒高臥北窓之下清風颯至自謂羲皇上人

○細道

考 暑き日を海に入たり最上川

○雪丸けちくしけや海にいれるゝ

○井筒氏水楼

○世の夏や湖水にうかふ浪のうへ

考 拾遺たゝむ

○長良川原臨なる賀島氏水楼にて

十八楼の記なり

○此あたり目に見ゆるものは皆涼し

考 笈日記ものゝ記には見風俗文選に

秋之部

○大津に侍りしを見舞ふとて消息せられけれは

蝶夢集にくるまたは日里了 湯り盆ござもいよ哉むまし者

○家はみな杖に白髪の墓参り

考 陸奥千鳥に一家みな白髪に杖忘水

一家みな老て袖はありけり陸奥千鳥に桃隣

奥羽脚の集蕉翁の甥なり

○細道 むさんやな兜の下のきり〳〵す

考 たしあなむさんやな　實盛の謡曲花實集此年の冬始て不易流行の教を説出てへり

○露とく〳〵心みにうき世すゝかはや

考 和漢三才圖會芳野の奥昔の清水西行法師菴室ノ跡有遺像一　浅くともよしや又汲人もあらし我にことたる山の井の水 西行　とく〳〵と落る岩間の苔清水汲ほすほともなき住居かなとかく人志るらん ○文考文操は西行といへり

○細道 浪の間や小貝にまじる萩の塵

考 山家集 汐そむるますほの小貝拾ふとて色の濱とはいふにやあるらん 西行 色濱越前

○武蔵野幕府に出仕をせんとし　政以下
欲先とすといへり

○明月の出るや五十一ヶ條

考 平朝臣貞永元年七月十日ト御成敗
式目ニアリ

〇名月の花かと見えて綿ばたけ

〇名月よ娘もとの窓や田のくろ

考 續猿蓑古文考評 月ならて川ある篠の
雲ハなくれなきりんあるかさ初時雨なる 宗祇法師
老杜カ唯雲水ノミナリトイヘル其次ノ棉畠月
ノ白ツラノミヤハナルヒカリヲハナトチラスハカリ
一花ニ清香月ニ影アリテ云々 古今物名

秋の夜ハ月のかつらも紅葉やゝ照る光さへちらぬばかりを

〇座右の銘 人乃短をいふことなかれ
おのれ乃長を説ことなかれ

〇ものいへば唇寒し秋の風

考 文選十五座右銘崔瑗兄璋為人所殺
瑗遂手刃其仇亡命蒙赦而出作
此銘以自戒嘗置座右故曰座右銘
後漢崔瑗字子玉涿郡人早孤鋭志
好學能傳其父業擧茂才為汲令

無ニ道フ人之短ヲ、無レ説己ガ之長ヲ一云々

○保生佐太夫ニ吟ス

先の石乃まくらもしらて四十雀

考 言る樵夫之所持許六ヘ文通真蹟ニ荘

掛かり抱ふお祖の尼の餘情ニはあるし

おのれ祢りて清くきこえられたのおもしろきにてや

咲ちまし白の亦くらむ

○菊乃香や庭にきれたる履の底

考 同文通ニ十月九日とあり

○園女家にて

志ら菊の目に立てゝみるちりもなし

説ニ云 考 紀家ふよ花と名月翁月 その女

哥仙あり 諷竹 渭川 支考 惟然

洒堂 舎羅 何中

○柳瀬可休亭

○祖父と親その子の庭や柿みかん

考 北條盛衰記五房州里見家ノ事ニ古哥ニ

親の子の子の子まて山賤の樽乃火

言こころみせよとまうされし 此哥考見守嵐雪句解ニ

冬之部

○新わらの出そめて早き時雨かな

考 去芳曰此句ハ暮秋頃伊賀ニテ早クヤ出サレシ句トソ

○金屏の松乃古さよ冬こもり

考 楳之都荒許六ヘ文通梅古さよとあり
惣水屏風にハ山を画くし

○木からしの身ハ竹斎に似たる哉

考 手尓葉の外あり 堀川太郎百首 東路のふ破の
関屋(せき)の板ひさし馬やり梅るゝ心ちこそすれ 仲實
竹斎ハ醫師と同时寛文の頃の人と云

○おのか音に鶏人かねん世そさゝせし迷て
老乃後志賀の里ふかくれ住けり(となり)
又大津松本に住けり 翁存とハ老
尼のもとにふして尋てまかりけるならと
語り出されるに付て拾ひしにはれハ

○少将の尼のはなしや志賀の雪

考 清巖茶話 藤原信實の女よ 藻壁門院の少将とてありし和哥よみ也 あの句ハ
清き別のあかつきこれかもしらぬ鳥乃啼くらむ云云 源平盛衰記 藥をて
ふるさへかの鳥とありて言めを見えつゝ
里まてわたるくらむ

○時雨川獵舟海より吹上野風
いとさむき時雨哉り

○さゞなみや馬より氷る新法師

考 笈の小文冬の日や

○塩鯛の齦も寒し魚の棚

考 唇竭則齒寒 左傳僖公五年 宮之奇ノ語 句兒曽其用此句ヲ曽トシ声カレテ猿ノ齒白シ峯ノ月 出巻末ニ 棚ハ店ノ字佳ナルカ

○あらおもしろものきのふきこぼれるかなくと汁

考 二字返音 蜷 芭蕉素堂信徳三吟三百句。

○月白き師走ハ子路が寐覚哉

考 中庸十章 子路問強 子曰南方之強與

○北方之強與。抑而強與。寛柔以教。不報無道。南方之強也。君子居之。衽金革。死而不厭。北方之強也。而強者居之

○蛤の生るかひあれとしのくれ

考 陸奥へ下る蛤も

○みつかくゝ雨乃らひ笠をきりて

○世にふるも更に宗祇のやとりかな

考 笈日記に世の中に世にふるも更に時雨のやとりかな 宗祇

蝶夢集出于雑之部

○歩行ならは杖つき坂を落馬かな 蝶夢集ニ出ヅ 畧

考 烏丸光廣卿の紀行に くたびれて ちからより通る旅人のこれ杖つきの里とそいふ みゆ

共幻住庵記通計九十五句

芭蕉句解参考下畢

○附録

幻住菴記略解 全文猿蓑集ニ出依テ略ス

支考文操ニ 祖翁ノ幻住菴の文ハ三通ありて始の一通ハ落柿舎にあり中の一通ハ賦なり終の一通ハ猿蓑集に出や賦ハ支考文操にのへたり

翁ここに隠るること二年ちかし。○翁の號初ハ杖錢子中ごろ風羅坊終りに芭蕉菴 標号ハ曲るハ地の名別なるや 杖銭と風羅ハ例の狂名なるへし

○石山の奥 江州勢多之南 ○新古今 都にも人やまつらん石山の峯にのこる秋の夜の月 長能

○翠微 ○山のすそ

○鳰の浮巣 ○夫木 かち鳴や水際のうききのに してさきるへいつる世をたのむらん

○入し山のやかて出しとさへ思ひよる叙

山家集 よしの山やかて出しと思ふ身を花ちりなはと人やまつらん 西行

○宿かし鳥 ○支考文操 西行の哥全文を

風俗文選　燕なりと

○魂呉楚東南にたゞし里　うしなふと

○杜子美登ル岳陽樓ニ呉楚東南ニ坼ケ乾坤日夜ニ浮ブ

○身は瀟湘洞庭をうつし川　○瀟ト湘トハ川ノ名楚國永州ノ内洞庭半ハ潭州半ハ岳州ニ屬ス中華山水ノ勝地

○南薫峯よりかをらし　○家語辯樂解舜彈ジテ五絃之琴ヲ造ル南風詩ヲ其詩ニ曰南風之薫ル兮可シ解ク吾

民之慍ヲ兮

○比良のたか根より　○萬葉　さゝ浪や比良山風のうみふけは釣するあまの袖かへる見ゆ

○早苗とる哥　○唄なるらん歟

○田上山は古人をおもふ　○積九又は鴨長明なと遁世してこゝにすみける　名寄　田上のさゝ竹のたけもすさるめり　小竹生

○黒津の里　甲賀郡　名寄　つのかやまゆくの（?）も禁しぬらん　後九条　つのかはのよるよるかく

松露しこそ黒津の里に到りてよめる
○網代くれはしろみえん万葉集の
姿なりけり。○丹桜ち万葉集
集第三柿本朝臣人麻呂従近
江國上来時至宇治河辺作歌一
首其哥ニ物乃部能八十氏河
乃阿白木爾不知代經浪乃去辺
白不母とよりなし詠もるをさしてく
よめる詞はみえへき思ふにその詞は網の詞
なるへし

○波海棠をいふなり王荊傳にあり
菴裁培を載せる徐佺か傳にみえて唯
睡辟山民となりて屢顧を見せたりけ
出し窓にゐて乱をおさへて思ひ 按スルニ文ノ波瀾ナリ ○祇徳
芭蕉文集徐佺作陳佺ニ誤也 ○山谷集 巻之一頁 題瀛峰閣
徐老海棠巣上 元注云 徐佺樂テ道ヲ隠ル於
藥肆ノ中ニ家ニ有海棠數株結ヒ巣ヲ其上ニ
時ニ與客巣ニ飲ス其ノ間ニ ○王公羽主簿山斧
菴 元注云 王道人参ニ禅ヲ四方ニ帰ル結フ

屋ニ於テ壽溥峯ノ上ニ嘗テ有リ毛人至テ其
間ニ問道ヲ○睡辟 辟与癖同 癖史ニ李嵓巌老
睡ヲ好メリ衆人ト會スルニ食罷ム皆棋ヲ下ス
嵓巌老ハ輙チ就キ枕ニ睡ル衆ノ數局ヲ閲ルトキ
一度展轉シテ云我始テ一局ナリ公等
幾ツ局ソトスケルトナリ○犀次顔ハ山ノ高キ皃ニテ
○亂ヲ捫文選ニ十嵇康與山巨源ニ絶交書
性復タ多ク亂把搔無已ト云云
○ゆきくりくねる雲ほそし○解見于參考ニ

○農談日既山の端ニ入ル○古文前集
雲谷雜詠 朱晦菴 朱文公也 野人載テ
酒来ル農談日已ニ夕ナリ此ニ息良已勤感
歎情何ソ極ン帰リ去テ莫頻ニ来ル林深テ
山路黙ナラン

○罔兩ハ影のほとり也○莊子齊物論
罔兩問景ニ曰曩ニ子行ク今子止ル曩ニ子坐ス
今子起ツ云云 口義ニ罔兩ハ影ノ邊ノ淡キ薄キ
者ト云云此即是非待ツ彼ヲ之喩也

○佛籬祖室

出所不詳追テ可考

○樂天ハ五臓の神をやふり　有三体詩

元稹寄樂天詩老逢佳景唯惆悵

兩地各傷無限神

○老杜ハ痩たり。老杜名甫字子美　李白贈杜甫云

飯顆山前逢杜甫頭戴笠子日卓午

為問縁何太痩生只為従前作詩苦

○まつたのむ椎の木もあり夏木立

源氏物語 椎か本 椎か本のいかなる木の

もとをさへたのむへく侍らんと

やていとゝ心ほそけなりけれはさし

ましかは何事をさせまいらせぬ

ちかいたてまつりてほとけ

のみこ花のかたにおもむきぬ

おこなひたまひけりとて申哉

浄ゆかりをとゝめやりける

かきくらしむらりはゐるをもけん
こちまりきこへしるすおもひ
出て
たよらんかげもたのむ薫（カホル）椎の本
世の中しきところなりにけるかな

幻住菴記畧解畢

幻住菴記畧解成焉
雲出散人恭識

夷中作

先生嘗只予が俳諧に於けるや已
なる理を筆にしてこそ此花に猶
句を縁参考をもって書斯の雪
外に心をしって梓にのりしを
見るの心よりて理由予が許にも
志も寓居し且唱和せし
し此跋を思ふよふそれ
清経の添をいるかたに雑く

業餘鈍きこゝろ毛筆を取て画

摸するものは子の美

文化丁卯の春

濤声亭

株々

静亭　松年

並記之

蕉門雪門 俳諧書籍目録

書林 文刻堂西村源六

蓼太句集 三世雪中庵明和の頃までの発句をあつむ 二冊

同 二編 初編よりもれたる安永中までの句を集 二冊

同 三編 二編に残る天明七までの句をあつむ 二冊

蓼太百歩集 蓼太先生草庵中の集文章発句あり面白き本なり 一冊

七柏集 雪中庵蓼太著 歌仙百廿章 時代変化の始終俳吟の歌仙なれども趣をのべ先生著述ありて三の中第一の書なり俳諧を志ある人は見るべき書也 四冊

雪門七部集 附合の秀逸を集め三百の句を集めて 山幸著 七冊

去嫌求砂歌 此書は手引草に基て去嫌を奇書なり便利の本也 蓼太著

佳吉千句 蓼太廿日夜句三先生の千句の附合の秀逸あつむる

墨水西岸行 雪門古光の人々隅田川の岸の発句あり

百桐々紀 蓼太先生独吟の五百韻あり

武聖三歌仙 むさし野紀行奇仙の句 蓼太著

秋の夜 不玉の歌仙を句翁の評あり 完来著

探荷集 雪門高弟秀逸の発句集なり
初編 二編 三編 蓼太評
四編 夏 蓼太評 秋冬 完来評
五編 六編 完来評 共七冊

附合小鏡 蓼太選 牛宗著 小本 一冊
三躰の解月花のこと発句のつけ
を外附合の仕やうまで故人の流を
委しく記す初心の為を出す

発句小かゞみ 蓼太選 三絡著 小本 一冊
発句の案じ方題の面をとることを
総て句案の一助となる事を出す

七部さがし 吏登述 蓼太著 一冊
芭蕉翁七部集の中解しがたきを
門人の問によって言々書分け
七部の側に就て見易からしむ

三吟未来記 芭蕉其角嵐雪三師の歌仙 蓼太著 一冊

鄙ぶり記 宗祇廿五箇条の解説 凡の捉あり 蓼太著 一冊

芭蕉庵再興集 蓼太著 一冊

三暮日記 同 俳諧歌仙有 一冊

鏡波紀行 蓼太先生文章発句 嬰兒著 一冊

秋山家 葉紅葉歌仙 夜兎著 一冊

附合高點集 蓼太 吐月 三絡著 小本 一冊

蓮華會集 蓼太著 表合 四季発句 先生五月雨の句程 叙南 詩文章入 三冊

雪門報恩集 完来再訂 全二冊

十三条 附合発句をよく俳諧の心得となる事をしるしたる 蓼太述

花ざんす 正花 転花の事委しく記す 同述

棚さがし 月との会で門人へ口授ありし先生自ら言せ口述しある書で俳名を盡ある之 蓼太著

ぬれむしろ 蓼太居士終焉の記そ門人発句歌仙有 四世完来述

吏登句集 二世吾中庵吏登翁の句集

亀戸奉納 撰華類題集 当時雪門諸家秀逸の句を集む 完来先生撰

心のしをり 文母著 附 月並四季 発句集 并 雪門歌仙 挿画入あり 三冊

雪のまち 阿人著 三冊

惑問珍 吏登著 秘伝の問答え

続起集 蓼太著 歌仙評あり 付録 雪門名家歌仙発句入

吐月句集 附 撰遺 子組亭の発句を多くあつむ 亘麦著 二冊

江の鴻まつて 完来著 紀行 一冊

雪門発句類題 嵐雪を始め雪門古今の発句を集 四冊

同 二編 四冊

俳諧名數　懐中本　一冊
此書は漢句付合文章等に入用の品
天門地理なとの土部にてわけ七夕の
七姫は天門の部にあり[illegible]八景
人事には年賀の異名秋門には忌日の
異名等を列さまく[illegible]俳諧
夷曲[illegible]雅[illegible]
重法の書なり

さる歌　治涼著　折本　一冊
古風俳歌おもしろく[illegible]の一助となる

ちかひ大全經目　立甫著　一冊
此書ハむかしより所々板行ありといへども
他本ハすこし誤ありて[illegible]

毛吹草　七冊

四季名よせ　小本　一冊
季立俳合しく[illegible]

かしま紀行　はせを翁著　梅人行　一冊

つくし集　同　素堂の紀行　梅人行　一冊

松島獨吟　同　著　一冊
[illegible]

いろはきれ　冬瓜坊支元著
[illegible]

冬瓜文庫　支元先生の文章
[illegible]

○俳諧御集物　板行　仕立

○同　表帖の類　板行

右俳諧御用[illegible]

右之外俳書數多[illegible]
西村源六

俳諧五百題發句集　春秋庵選
古今乃名句を集む　一冊

三句解　[illegible]著　三冊
三句の[illegible]

増山の井補注　雪中庵[illegible]　一冊
[illegible]

俳書坊
江戸本石町十軒店西側
西村源六

京山先生篆刻取次
水晶印　銅印　石印
古體[illegible]